

## 今井登志喜関係文献目録

佐野 匡平

### はしがき

本稿は 2014 年度に千葉大学人文社会科学研究所に提出した筆者の修士論文である「今井登志喜の歴史学と世界像をめぐる諸問題」の史料及び参考文献として収集、活用した文献を分類・整理したものである。また、目録を参照するための前提として、今井登志喜の経歴やその活動についての概観を加えた。

今井は戦時期に東京帝国大学文学部長という難しい立場にあった中でその役職を務め上げ、また長く担当した西洋史学科には今井の影響として、戦時期にありながら「自由な学的環境」が醸成されていたという。また、知識人としての活動としては様々な総合雑誌に論説を発表し、時節の問題についての座談会や講演で意見を発表していた。

今井は現在、歴史学からは忘れられた存在となっているが、戦後歴史学の構築への貢献や、アカデミズムの学問的潮流の正統な受け継ぎを果たした人物として、時代時代においてすぐれた評価が与えられてきている。この評価には現在のところ一考の余地があり、それについて考察したものを本年度に提出した修士論文としてまとめた。

今井の問題を明らかにすることは、戦時期という時代においても歴史学には良質な部分が存在することを主張し、それを顕彰しようと試みた戦後歴史学や東大の西洋史学における問題を明らかにすることにもつながると考えられる。この問題についてのアプローチとして、この目録が活用されることを期待したい。

### 今井登志喜の研究と活動

#### はじめに

今井登志喜は戦前から戦後直後にかけて、東京帝国大学文学部教授を務め、1939 年からは文学部長も務めた歴史家である。その専門はイギリス史を中心とした西洋史であり、またドイツを中心とした西洋の都市の発達史にも関心を持っていた。

今井の歴史学は系統的には現代の歴史学と直接的な関係を持っておらず、そういう意味では今井は忘れられた歴史家となっているものの、後述する学問的業績や、戦時期の東大文学部長という立場、教師としての東大西洋史学科への感化によって、戦後歴史学に一定の影響を与えた存在である。

本章では今井の略歴、学問的業績や言論活動について紹介するほか、今井がその創立に関わった各種の学会についても、その性格や貢献に

ついて紹介する。

### 今井登志喜略歴

今井登志喜は1886年6月8日、長野県諏訪郡平野村今井部落<sup>1</sup>の農家に生を受けた。1905年に諏訪中学校<sup>2</sup>を卒業すると東京に出て第一高等学校第一部に入学する。1908年に一高を卒業して東京帝国大学文科大学に入学し、箕作元八や坪井九馬三の下で歴史学を学んだ。1911年に東大を卒業して大学院に入学する。大学院時代の1913年に鮎沢久代と結婚し、のちに一男三女をもうけることとなる。

1916年に大学院を満期となってからは、しばらく定職のない時代が続いたが1920年に一高教授に任ぜられると、翌年には東大文学部講師となり、1923年には助教授となった。同年にイギリス・ドイツ・フランス・アメリカの4カ国に留学して在外研究を行い、その中では日本にドイツの歴史学を輸入したお雇い外国人として知られるルートヴィヒ・リースの授業を聴講したことが今井の回顧録からわかっている。

今井は大学院時代から学術雑誌に学術論文を発表し始めていたが、1926年に留学から帰国すると精力的に学術論文を投稿するようになる。その活動の中で1929年には最初の「都市学会」を設立している。1930年には東大教授となり、また『東京帝国大学五十年史』の編纂を囑託され、これは2年後の1932年に完成を見た。また、現在も活動する社会経済史学会を創立に携わったのもこの年である。

この頃から今井は学術論文だけでなく、時局に対する論説や講演、座談会への出席など、言論活動への露出を強めていく。1936年には東大の評議員に任命され、その任期の中で、東大経済学部において発生した大学の自治をめぐる事件である平賀肅学に直面し、「少なからぬ貢献をした」とされている<sup>3</sup>。

1939年に東大文学部長となった今井は翌年肺壞疽のため入院して休職するも、その翌年には復職し、1944年にまたも病気のため辞任するまで四年半の任期の中で三選を果たした。戦争の終わった1947年に定年により東大教授を退任したあとは、東大名誉教授として、かつての講義内容を著作として出版するほか、登呂遺跡調査会委員会委員長や学と援護会理事長といった役職を歴任し、1950年に心筋喘息により没した。その死を悼み、関係の深かった雑誌『信濃』において追悼文集が発行された。

---

<sup>1</sup> 現在の長野県岡谷市今井にあたる。

<sup>2</sup> 現在の長野県立諏訪清陵高等学校。

<sup>3</sup> 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』1巻、吉川弘文館、1979年、743ページ。項目執筆者は林健太郎。

## 学風と学問的業績

今井の学風としては、ランケ以来のドイツ史学の影響を受けた初期の日本の西洋史学における政治史・外交史とのつながりを受け継ぎつつも、歴史学の新しい傾向にあわせて、それにアジャストしようと試みたものであった。社会経済史学会の創立発起人であることはそれを示すものである。経済史研究の分野ではトインビーやカニンガム、カール・ビューチャーやゾンバルトの業績が参考にされている。

イギリス史についても新しい傾向への志向が現れており、1927年からの5年間の連続講義「英国社会史」のように「政治・外交等の方面のみを取扱う狭い立場を越えて、文化史あるいは社会史の方面にうつらなければならぬ」<sup>4</sup>という立場から歴史観が構成され、また歴史叙述がなされていった。その中でイギリス史ではグリーンやトレヴェリアンの業績が参考にされていたようである。

今井の都市史研究は地理学と、特に人口学的なアプローチが大きな特徴である。今井が都市史研究に取り組んだ動機の根幹には近代の大都市が生み出した社会問題があり、それへの着目から、社会問題の根源となった都市の発達のありようを探ることが今井の目的であった。

その研究を通して、自らの専門分野でもあるヨーロッパ社会の性質と発展のありように注目していくのである。それゆえ、この分野ではイギリスの産業革命についての研究から人口への影響も考察したトインビーや、人口史の大家として知られるペロッホやゴンム、都市発達の理論としての経済史からカール・ビューチャーとゾンバルトの影響がある。

「歴史学研究法」は、いくつかの修正はあるものの、ベルンハイムなどのヨーロッパの史学方法論の直輸入であるという面が強い。特徴として方法論の実践として日本史の出来事が使われているという面がある。ここで今井の故郷である塩尻峠の事例を持ち出しているのは、今井の地方史への関わりと諏訪への愛郷心を表すものである。

今井の学問的業績としては以下のものがある。戦後に東大での連続講義を文字に起こして出版された『英国社会史』は、当時出版されたイギリス史の通史として高い評価が与えられている。また「歴史学研究法」は彼の歴史家としての立場を表すものでもあり、後の東大において史学方法論のテキストとして長年読み続けられたものであった。

『英国社会史』と同様に東大での連続講義を元とした『近世における繁栄中心の移動』は、14世紀にはじまるオランダの経済発展が、時期ごとにその繁栄の中心が移動していくこと、やがてその中心地がフランス、イギリスへと移っていく様を通史的に捉えたものである。

今井の都市史研究を集成し、一冊の著作としたのが『都市発達史研

---

<sup>4</sup> 今井登志喜『英国社会史』東大協同組合出版部、1948年、1ページ。

究』である。本書は西洋と日本の二部に別れ、通史的に西洋の諸都市を見るもの、日本の諸都市を主に江戸から明治の変化を見るものに分けられている。

もともと今井は東大の退官後にその講義内容を厳密に検討し、補正を加えて出版する構想を保持していた。しかし、戦時中の東大文芸部長という役職にあったことか、はたまた酒と煙草をこよなく愛したその生活習慣からか、先述したように1944年に東大文学部長を辞した頃から病魔に蝕まれるようになり、「多く頭脳を要する仕事は医師から厳禁されている」<sup>5</sup>というような状況に追い込まれた。それゆえに、今井の著書は「歴史学研究法」を除いて、戦後に今井の弟子たちが今井の講義内容をおこして書籍化したものや、戦前・戦中に執筆したものをまとめた論文集となっている。

今井の学風は、その後に直接的な影響を持たなかった。戦後の日本の経済史をリードしたのはヴェーバーを元とした大塚史学であり、今井の経済史的視座に影響を与えたゾンバルトとは対立するものであったことは一つの理由ではあるだろうが、今井の歴史学自体が一定の問題点をはらんでいることも大きな理由であるかもしれない。

今井の西洋史研究と都市史研究からは、今井のヨーロッパ中心主義や、日本を欧米と並ぶ列強国として表そうとする姿を見られる。「歴史学研究法」はその後も史学方法論のテキストとして使用されたものの、ベルンハイムの総括要約という性格の強い「歴史学研究法」が目指す実証史学は、それゆえに同時代の問題を批判する学としての性質が薄弱であるといえ、これは今井の世界像を帝国主義の側に引き付ける一つの要因であったといえるだろう。

## 言論活動

先述した西洋史家としての立場に加え、東大文学部長という重責を担ったことにより、今井はヨーロッパに詳しい専門家として、『改造』や『文芸春秋』、『婦人之友』といった総合雑誌を始めとした数々の雑誌に論説や講演記録が掲載されている。また、同様にこのような雑誌で開かれた座談会において、今井と同様に海外事情に聡い評論家や学者とともに諸外国の事情やそれに伴う日本のあるべき姿への提言を行い、または柳田国男や和辻哲郎、長谷川如是閑といった人物とともに日本文化について議論を交わしている。

略歴の節で見たように、今井は東大教授となった1930年頃から言論活動への露出を始め、それは東大評議員、東大文学部長といった役職を歴任していくと加速度的に強くなっていく。それは、出版社側の東大文学部長というような権威性を求める動きと重なるものである

---

<sup>5</sup> 同上書、I ページ。

が、それとともに、求められるコメントも変化していく。

当初は西洋史家として、ヨーロッパやアメリカの状況を歴史家としてどう見るかという論説が、今井の言論活動の多くを占めるものであった。しかし、1935年に「日本文化を再評価する談話会」という『日本評論』誌上で行われた座談会に出席したことを皮切りに、今井は欧米の時局に関するだけでなく、それに対する日本のあり方への発言も求められていく。

日中戦争が始まると、今井の言論活動はさらに新しい性格を帯びるようになる。それは民族政策や植民地政策といったものである。その中では満州国を日本と「不可分の関係にある独立国」<sup>6</sup>であると呼ぶほか、少数民族に対する民族政策などは、少数民族の数の少なさから必要とはしないというものである<sup>7</sup>。これらの視点は今井の中に帝国主義や植民地主義が内在化していることを表すものであり、これらの性質を持った論説や講演記録が、その後も多くの雑誌に掲載されていくことになる。

今井は前節で述べたような病気による制限付きの状況の中で、戦後においても数は少ないもののいくつかの論説を発表している。しかしそれらは、日本を「文化国家」という形で新たな帝国主義国としての再興を目指すような、帝国主義への批判を欠いたものであり、その後の歴史学をリードした戦後歴史学のあり方とは明確に線を引かれるものであった。

## 後世への影響

今井が戦後の歴史学から肯定的評価を受け続けてきたのは以下のような理由がある。今井は教師としての能力にもすぐれた人物であったとされ、その門下からは村川堅太郎や堀米庸三、林健太郎、尾鍋輝彦といった歴史家を輩出している。後進の育成の他にも、リベラリストとして知られた今井の手によって作られた西洋史学科という環境は、平泉澄によって皇国史観の影響下に置かれた同時期の国史学科とは一線を画して、「自由な学的環境」となっていたという評価が戦後になされている<sup>8</sup>。

今井の業績を踏まえて樺山紘一は、今井の一連の仕事を「社会史」<sup>9</sup>への取り組みの先見性や、都市史研究のために学会を設立する学際性、

<sup>6</sup> 今井登志喜「植民地と満州」『学徒至誠会派遣団報告 昭和11年度 満州編』学徒至誠会、1939年、30ページ。

<sup>7</sup> 「東亜民族政策論」『現代』（大日本雄弁会）、22巻9号、1941年9月、81ページ。

<sup>8</sup> 三浦一郎「歴研と私」歴史学研究会編『証言 戦後歴史学への道』青木書店、2012年、190ページ。

<sup>9</sup> ただし今井の「社会史」の定義は、現在の歴史学で扱われる社会史のものとは異なるものである。

東大で培われたアカデミズム史学の継承を評価し、今井の学問のアクチュアリティが現代においても存在し続けていることを主張している<sup>10</sup>。

これらの戦後歴史学からの肯定的評価もさることながら、それと対立する保守派の知識人や言論人も今井を高く評価してきた。今井を「最大の恩師」と語り、今井の伝記を著した林健太郎や、『中央公論』の元編集長であり、その著書の中で今井を「自由主義の学風を歴史の世界で開花させた貴重な歴史的存在」<sup>11</sup>であるとする粕谷一希がその代表例である。

これらのエピソードに加えて、今井は既にいくつか述べたように、学会の設立などにも関与している。例えば1930年には社会経済史学会創立の50人の発起人となり<sup>12</sup>、長らく理事・顧問を務めているほか、第1回大会の公開講演会において、「江戸時代の社会史的考察」というタイトルで講演を行っている<sup>13</sup>。

また、1929年に東大の社会学及び西洋史学研究室を中心に組織されたものを拡大再生する形で1937年に創立した都市学会にも関わり、理事として参加している。こちらも同様に都市学会の第1回講演会において「都市の歴史的考察」というタイトルで講演を行っている。この都市学会は1953年に創立される日本都市学会の前身となった学会である。

また、地元・諏訪への愛郷心から、定職がなかったところの1918年に長野県諏訪郡史編纂を委嘱され、今井は諏訪史が「各時代において常に日本史の上に重要な意義を」<sup>14</sup>持っていることに着眼し、第一級の学者に執筆を依頼した。『諏訪史』のシリーズの第一巻の執筆者の鳥居龍蔵、二巻の宮地直一、三巻の渡辺世祐という構成になったのは今井の尽力が大きいという。

今井は地元である諏訪とその歴史に『諏訪史』編纂に携わった後もコミットし続けた。1941年に出版された『信濃二千六百年史』には監修として参加したほか、歴史家としての専門である西洋史や都市史においては、史料上の制約などから難しかった実証的な学術論文をいくつか執筆している。その他にも総合雑誌において故郷の様子や祭り

<sup>10</sup> 権山紘一「今井登志喜」今谷明ら編『20世紀の歴史家たち(1)』日本編、刀水書房、1997年、121-131ページ。

<sup>11</sup> 粕谷一希『生きる言葉一名編集者の書棚から』藤原書店、2014年、110-111ページ。

<sup>12</sup> 社会経済史学会編『社会経済史学会五十年の歩み—五十年史と回顧・総目録』社会経済史学会、1984年、4ページ。

<sup>13</sup> なおこの講演会は「我国社会経済史学会の諸権威をあつめたものであり、わが学会の力強き歩みを如実に指示するにまことふさわしきものであった」という。同上書、55ページ。

<sup>14</sup> 同上書、36ページ。

の様相についての記事を執筆し、戦後には選挙の応援演説もするなど、故郷とのつながりを表すエピソードも数多い。

### おわりに

学問や言論活動において問題点を抱えつつも、今井登志喜という歴史家は長らく肯定的な評価を受け続けてきた。それは「歴史学研究法」による史学方法論への貢献や学会の創立、故郷である諏訪の歴史を地方史研究として一本立ちさせた学問的な貢献もさることながら、後世の人間たちによって作られてきた高評価が現在に連なっているということが何よりも大きい要因である。

それは、林健太郎や粕谷一希といった保守派と、戦後歴史学のような左派やリベラルの側の両面が、それぞれに今井を戦時期の日本の歴史学において皇国史観などの国家主義的風潮に対抗し得た良質な存在として位置づけたいがために行われたことである。それは戦時期という時代における表現の自由の統制によってその存在を許されなかったマルクス主義歴史学以外にも国家主義への対抗軸が存在したとして、その成果を汲み取ろうとするあり方である。

しかし、そのあり方は戦後歴史学と立場を異にする今井の歴史学が保持する問題性を隠蔽し、彼の場合はリベラリストという言葉によって紛らわそうとするものでもある。その問題性に正対してこなかったことは、林のような保守派の論客によって顕彰され、利用される人物を<sup>15</sup>、戦後歴史学に貢献した人物として褒めそやすという、ねじれの現象を生むことになった。

このような問題を考慮することによって、今井登志喜という歴史家から、戦後歴史学という学派にどのような問題があったかを導き出せるように考えられる。今井登志喜という歴史家が現在の歴史学において忘れられた存在となっていることは最初に述べたが、戦後歴史学を再考し、批判するという意味においては、彼には今なおアクチュアリティが存在するとも言えよう。

---

<sup>15</sup> 例えば林による今井の伝記では、今井の「社会史」概念や、当時の経済史においてマルクス主義が中心的役割から外れ始めていることを持ちだしてマルクス主義の正当性を拒否する。林健太郎『今井登志喜』諏訪史談会、1984年、22-23ページ。

## 今井登志喜関係文献目録

### 凡例

- (1) 今井自身による論考と同時代史料、関係資料に分類した。
- (2) 今井自身による論考は著作、書籍収録の論考、逐次刊行物の論考、新聞、監修・講義記録に分類した。
- (3) 同時代史料は書籍、逐次刊行物、新聞に分類した。
- (4) 関係資料は今井の死後、一定の期間が経ってから発行された出版物を表す。書籍、逐次刊行物、新聞、インターネットに分類した。
- (5) 以上のように分類した上で、今井自身による論考と同時代史料は年代順、関係資料に関しては著者名の五十音順に整理した。
- (6) 漢字の旧字・異体字・俗字・略字については新字体に統一した。

### 今井自身による論考

#### 論考（著作）

1. 今井登志喜『外国歴史物語』興文社、1929年。
2. 今井登志喜『新制・中等西洋歴史』目黒書店、1930年。
3. 今井登志喜『西洋歴史解説』目黒書店、1934年。
4. 今井登志喜・今井克積『国史学び方考え方と解き方』考え方研究会、1934年。
5. 今井登志喜『英国社会史』東大協同組合出版部、1948年。
6. 今井登志喜『世界史概説』日本出版協同、1949年。
7. 今井登志喜『100万年の人間ものがたり』小学館、1949年。
8. 今井登志喜『近世における繁栄中心の移動』誠文堂新光社、1950年。
9. 今井登志喜『都市発達史研究』東京大学出版会、1951年。
10. 今井登志喜『西洋政治史』岩波書店、1952年。
11. 今井登志喜『都市の発達史—近世における繁栄中心の移動—』誠文堂新光社、1980年。
12. 今井登志喜『都市発達史研究 新装版』東京大学出版会、2001年。

#### 論考（書籍収録）

1. 今井登志喜「中古末期の独逸都市の発達」小田内通敏編『都市と村落』地人学社、1914年。
2. 今井登志喜「東京の背景」一高史談会編『東京近郊史蹟案内』古今書院、1927年。
3. 今井登志喜「欧州政治史（第一回）」日本評論社『社会経済体系18巻』日本評論社、1928年。
4. 今井登志喜「欧州政治史（第二回）」日本評論社『社会経済体系19巻』日本評論社、1928年。



5. 今井登志喜「欧州政治史（第三回）」日本評論『社会経済体系 20 卷』日本評論社、1928 年。
6. 今井登志喜「江戸より東京の推移」史学会編『明治維新史研究』富山房、1929 年。
7. 今井登志喜「序」堀江三五郎『諏訪湖氾濫三百年史』諏訪湖氾濫史刊行会、1929 年。
8. 今井登志喜「西洋都市の発達」岩波書店『岩波講座地理学 2 卷』岩波書店、1931 年。
9. 今井登志喜「歴史記述の方法」理想社出版部編『歴史の諸問題』理想社出版部、1932 年。
10. 今井登志喜「史学の本質に関する二問題」六星館編『六星館論文集 1 輯』六星館、1932 年。
11. 今井登志喜「カナタ 沿革及び現状」石橋五郎ほか編『世界地理風俗大系 18 卷』新光社、1932 年。
12. 今井登志喜「大学教育の問題」岩波書店編『岩波講座教育科学 20 冊』岩波書店、1933 年。
13. 今井登志喜「都市の発達」文部省普通学務局編『郷土教育講演集』刀水書房、1933 年。
14. 今井登志喜「住民」改造社編『地理講座 外国編 第 8 卷（北アメリカ）』改造社、1934 年。
15. 今井登志喜「政治」改造社編『地理講座 外国編 第 8 卷（北アメリカ）』改造社、1934 年。
16. 今井登志喜「大学の問題」帝国大学新聞社編『学制改革論』帝国大学新聞社出版部、1934 年。
17. 今井登志喜「文学部の制度」帝国大学新聞社編『学制改革論』帝国大学新聞社出版部、1934 年。
18. 今井登志喜「アメリカ大陸の趨勢」今井登志喜・仲摩照久・村川堅固『一九三四年之世界情勢』東洋拓殖協會、1934 年。
19. 今井登志喜「土橋さんの思出」純勝会編『真昭院殿追悼号』純勝会、1934 年。
20. 今井登志喜「城下町の地理的条件」地理教育研究会編『聚落地理学論文集』地理教育研究会、1935 年。
21. 今井登志喜「歴史学研究法」国史研究会編『岩波講座日本歴史 1 卷』岩波書店、1935 年。
22. 今井登志喜「序」栗岩英治著『素描上杉謙信』栗岩英治、1937 年。
23. 今井登志喜「歴史上より見たる江戸の町」日本評論社編『東京市町会時報』日本評論社、1937 年。
24. 今井登志喜「西洋史学の本邦史学に与えたる影響」史学会編『本邦史学史論叢 下卷』富山房、1939 年。

25. 今井登志喜「民族興亡論」人口問題研究会編『人口問題講演集』人口問題研究会、1939年。
26. 今井登志喜「植民地と満州」学徒至誠会編『学徒至誠会派遣団報告 昭和11年度 満州編』学徒至誠会、1939年。
27. 今井登志喜「歴史上より見たる英国の危機」日本大学文学科編『日本大学文学科研究年報 7集』日本大学文学科、1940年。
28. 今井登志喜「本邦都市の発達」全国都市問題会議編『全国都市問題会議総会文献 第7回』全国都市問題会議事務局、1940年。
29. 今井登志喜「総説」世界文化史体系『第24巻（現代の世界）』誠文堂新光社、1940年。
30. 今井登志喜「アジアに寄する言葉」アジア問題講座『2巻』創文社、1940年。
31. 今井登志喜「米国史」研究会編『研究社英米文学語学講座 7』研究社、1941年。
32. 今井登志喜「序説」今井登志喜編『英国と世界の対立 上巻』蜚雪書院、1941年。
33. 今井登志喜「序」信濃毎日新聞社編『信濃二千六百年史』信濃毎日新聞社、1941年。
34. 今井登志喜「世界の現段階と日本の世界史的地位」辻善之助ほか監修『河出書房世界歴史 10巻』河出書房、1942年。
35. 今井登志喜・板倉勝正「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 2巻』誠文堂新光社、1942年。
36. 今井登志喜「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 5巻』誠文堂新光社、1942年。
37. 今井登志喜・堀米庸三「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 6巻』誠文堂新光社、1942年。
38. 今井登志喜・西村貞二「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 7巻』誠文堂新光社、1942年。
39. 今井登志喜「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 8巻』誠文堂新光社、1942年。
40. 今井登志喜「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 9巻』誠文堂新光社、1942年。
41. 今井登志喜・高橋幸八郎「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 10巻』誠文堂新光社、1942年。
42. 今井登志喜・矢田俊隆「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 11巻』誠文堂新光社、1942年。
43. 今井登志喜・高橋幸八郎「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『日本文化史大系 12巻』誠文堂新光社、1942年。
44. 今井登志喜「序」E.スコット著山川敏夫訳『オーストラリヤ史』東華堂、1943年。

45. 今井登志喜・堀米庸三「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『新修日本文化史大系』誠文堂新光社、1943年。
46. 今井登志喜・西村貞二「一四 西洋の状態」誠文堂新光社編『新修日本文化史大系』誠文堂新光社、1943年。
47. 今井登志喜「一五 西洋の状態」誠文堂新光社編『新修日本文化史大系』誠文堂新光社、1943年。
48. 今井登志喜「大都市成立の歴史」毎日新聞社文化部編『都の歴史と文化』北光書房、1943年。
49. 今井登志喜「転落英帝国の概観」毎日新聞社編『崩れ行く英帝国二十年史』毎日新聞社、1943年。
50. 今井登志喜「聡明な叡智を發揮せよ」帝国大学新聞社編『大学と学問』帝国大学新聞社出版部、1946年。
51. 今井登志喜「序」満江巖『ナイルの流れ』清水書房、1948年。
52. 今井登志喜「序」林健太郎『西洋史学入門 上巻』大月書店、1949年。
53. 今井登志喜「明治期の学生」学生書房編集部編『学生の頃：決定版』学生書房、1949年。
54. 今井登志喜「序」矢田俊隆・山上正太郎共編『ヨーロッパの天才たち』創芸舎、1950年。
55. 今井登志喜「序」林健太郎『西洋史学大綱』河出書房、1952年。

#### 論考（逐次刊行物）

1. 今井登志喜「西洋に於ける都市の変遷」『歴史地理』27巻5号、1916年5月。
2. 今井登志喜「大都市と郊外町」『都市問題』3巻6号、1916年。
3. 今井登志喜「思い起す百四十年の昔—アメリカ合衆国の独立」『柔道』（東洋哲学発行所）3巻7号、1917年7月。
4. 今井登志喜「武士と石高」『東洋哲学』25巻4号、1918年4月。
5. 今井登志喜「因果関係の明確な理解」『受験と学生』3巻9号、1920年9月。
6. 今井登志喜「新世界地理と準備法」『受験と学生』4巻2号、1921年2月。
7. 今井登志喜「大都市と郊外町」『地球』7巻2号、1927年2月。
8. 今井登志喜「国史に於ける西洋史学の応用」『国学院雑誌』33巻4号、1927年4月。
9. 今井登志喜「村落人口の絶対的減少」『経済往来』2巻8号、1927年8月。
10. 今井登志喜「山中謙二著『西洋史概説』」『史学雑誌』38巻12号、1927年12月。

11. 今井登志喜「カールスルーエとマンハイム」『史学雑誌』39巻4号、1928年4月。
12. 今井登志喜「歴史智識の実際的意義」『史学雑誌』39巻10号、1928年10月。
13. 今井登志喜「民族主義」『大崎学報』7巻5号、1928年11月。
14. 今井登志喜「歴史と文学」『歴史教育』3巻4号、1928年。
15. 今井登志喜「歴史に於ける比較研究の問題」『史学雑誌』40巻11号、1929年11月。
16. 今井登志喜「<昭和4年度大会>都市の形状の歴史的考察」『史林』15巻1号、1930年1月。
17. 今井登志喜「郷土の歴史地理研究」『信濃教育』525号、1930年7月。
18. 今井登志喜「ブリタニヤに於けるローマ人の都市とアングロサクソンの都市」『史学雑誌』42巻3号、1931年3月。
19. 今井登志喜「上代の東山道御坂より碓氷迄の駅路」『歴史地理』58巻2号、1931年8月。
20. 今井登志喜「米国の太平洋侵略史」『世界知識』2巻増刊（日米戦うべきか）、1932年5月。
21. 今井登志喜「坂口昂著『独逸史学史』」『社会経済史学』2巻5号、1932年8月。
22. 今井登志喜「江戸の社会史的一考察」『社会経済史学』2巻7号、1932年10月。
23. 今井登志喜「歴史記述の方法」『理想』30号、1932年。
24. 今井登志喜「歴史叙述に於ける「歴史は繰り返す」と云う意義の吟味」『哲学雑誌』565号、1934年3月。
25. 今井登志喜「史学と歴史教育」『教育研究』421号、1934年7月。
26. 今井登志喜「国民主義と国粹主義」『中央公論』49巻9号、1934年9月。
27. 今井登志喜「戦後に於ける欧州の史的考察」『会誌』（日大地歴学会）4号、1934年。
28. 今井登志喜「神長官守矢満実書留の錯簡」『信濃教育』585号、1935年7月。
29. 今井登志喜「大学教育の功労者としての濱尾新先生」『教育』（岩波書店）3巻9号、1935年9月。
30. 今井登志喜「1913年のドイツの教訓」『改造』17巻10号、1935年10月。
31. 「日本文化を再評価する談話会」『日本評論』10巻10号、1935年10月。
32. 今井登志喜「歴史に於ける比較研究の問題」『史学雑誌』49巻

- 11号、1935年11月。
33. 今井登志喜「歴史上のエチオピア」『日本評論』10巻11号、1935年11月。
  34. 今井登志喜「城下町の地理的条件」『地理教育』（地理教育研究会）第1増刊、1935年。
  35. 今井登志喜「世界における日本民族の問題 歴史から見た民族」『改造』18巻1号、1936年1月。
  36. 今井登志喜「独仏係争史論」『世界知識』9巻5号、1936年5月。
  37. 今井登志喜「子供西洋史」『婦人之友』30巻11号、1936年11月。
  38. 今井登志喜「イギリス議会を語る」『世界知識』10巻2号、1937年2月。
  39. 「『曖昧』を語る」『婦人之友』31巻2号、1937年2月。
  40. 「戦争か平和か大座談会」『世界知識』10巻3号、1937年3月。
  41. 今井登志喜「英国的フェーヤ・プレー」『文芸春秋』15巻3号、1937年3月。
  42. 今井登志喜「民族と都市の形態」『思想』179号、1937年4月。
  43. 「国民性の陶冶」『婦人之友』31巻6号、1937年6月。
  44. 今井登志喜「都市の歴史的考察」『都市問題』25巻1号、1937年7月。
  45. 今井登志喜「生活随想 日本と支那」『婦人之友』31巻10号、1937年10月。
  46. 今井登志喜「ビスマルク的転回」『文芸春秋』15巻14号、1937年11月。
  47. 今井登志喜「宗教戦争（思想的対立と戦争）」『日本評論』12巻13号、1937年12月。
  48. 今井登志喜「背後の英国を衝く 英国東洋政策の基調」『改造』19巻15号南方支那号、1937年12月。
  49. 今井登志喜「思想的対立と戦争」『戦争の理論』2巻3号、1937年。
  50. 「北支開発への希望」『中央公論』第52年臨時増刊、1937年。
  51. 「国文学者に要求する（アンケート）」『文芸復興』1号、1937年。
  52. 今井登志喜「歴史教授を視察して」『信濃教育』615号、1938年1月。
  53. 今井登志喜「19世紀に於ける人口増加について」『史学雑誌』84号、1938年2月。
  54. 今井登志喜「欧洲大戦中の独逸（其一）」『皇民』49巻3号、

- 1938年3月。
55. 今井登志喜「英国外交の民主性と独裁性」『改造』20巻4号、1938年4月。
  56. 「座談会 新一汁一菜を中心に 国民生活更新を語る——七月九日・自由学園に於て」『婦人之友』32巻8号、1938年8月。
  57. 今井登志喜「帝国大学改革問題 大学人事の問題」『改造』20巻9号、1938年9月。
  58. 今井登志喜「口絵 その他 世界大戦と交戦各国のポスター」『婦人之友』33巻1号、1939年1月。
  59. 「1 長期の努力によって出来た事 2 長期にわたって建設したい事 回答七十六氏」『婦人之友』33巻1号、1939年1月。
  60. 今井登志喜「人口問題の新しき方向」『日本医事新報』859号、1939年2月。
  61. 「座談会 長期建設と若き世代」『婦人之友』33巻3号、1939年3月。
  62. 今井登志喜・辰野隆「大学教授対談録」『文芸春秋』17巻5号、1939年3月。
  63. 今井登志喜「人口増減の考察」『医事公論』1394号、1939年4月。
  64. 「映画的表現時代」『セルパン』99号、1939年4月。
  65. 「戦争と民族問題座談会」『文芸春秋』17巻9号、1939年5月。
  66. 「《<特輯>国内革新の要望》法科万能の打破」『中央公論』54巻5号、1939年5月。
  67. 今井登志喜「戦争と平和」『文芸春秋』17巻12号、1939年6月。
  68. 今井登志喜「ビスマルクとヒトラー」『知性』2巻6号、1939年6月。
  69. 今井登志喜「移り行く英国の立場—歴史家の観た「持てる国」英国の正体」『文芸春秋』17巻16号、1939年8月。
  70. 今井登志喜「欧州大戦の歴史的考え方」『文芸春秋』17巻22号、1939年11月。
  71. 「座談会 日本文化の検討」『改造』22巻1号、1940年1月。
  72. 「浮世はなれて海上閑談会」『文芸春秋』18巻9号、1940年6月。
  73. 今井登志喜「歴史より観たる英国の危機」『文芸春秋』18巻10号、1940年7月。
  74. 今井登志喜「英国の植民地獲得」『大陸』1940年7月号、1940年7月。
  75. 今井登志喜「生活随想 大戦と英国」『婦人之友』34巻7号、

1940年7月。

76. 「《新政治体制の出路<特輯>》かくあるべし新政治体制」『中央公論』55巻8号、1940年8月。
77. 今井登志喜「口絵 私の郷里 私の生れた村と山」『婦人之友』34巻10号、1940年10月。
78. 「座談会 歴史雑談」『改造』22巻14号、1940年11月。
79. 「座談会 家族精神を語る」『婦人之友』35巻1号、1941年1月。
80. 「座談会 アメリカの検討」『改造』23巻5号、1941年3月。
81. 今井登志喜「今大戦の連想」『改造』23巻10号（時局版17）1941年5月。
82. 「世界はどうなる」『週刊朝日』40巻4号、1941年7月。
83. 「大戦後の世界の新秩序を語る（座談会）」『太平洋』（太平洋協会）4巻7号、1941年7月。
84. 今井登志喜「講筵十二ヶ月 歴史家のみた欧州動乱」『婦人之友』35巻8号、1941年8月。
85. 「東亜民族政策論」『現代』（大日本雄弁会）22巻9号、1941年9月。
86. 今井登志喜「日本文化の性格」『日華学報』6巻16号、1941年9月。
87. 今井登志喜「御射山祭」『文芸春秋』19巻10号、1941年10月。
88. 今井登志喜「冬将軍」『改造』23巻22号、1941年11月。
89. 今井登志喜「巻頭の辞」『日本史学』（日本大学史学会）7号、1941年。
90. 今井登志喜「都市と文化」『知性』5巻9号、1942年9月。
91. 今井登志喜「教育審議会の意義」『改造』24巻10号、1942年10月。
92. 今井登志喜・長谷川如是閑「歴史の性格（対談）」『日本評論』18巻2号、1943年2月。
93. 今井登志喜「歴史学の基礎」『理想』17巻3号、1943年3月。
94. 「座談会 決戦体制と学徒動員」『婦人之友』37巻8号、1943年8月。
95. 今井登志喜「巻頭の辞」『日本史学』（日本大学史学会）8号、1943年。
96. 今井登志喜「国難突破の気魄」『週刊朝日』46巻6号、1944年8月。
97. 「自由放談」『ホープ』1巻1号、1946年1月。
98. 今井登志喜「世界史的に観た日本の地位及び将来」『潮流』（潮流社）1巻2号、1946年2月。

99. 今井登志喜「個性完成の教育」『実業の日本』48巻4号、1946年4月。
- 100 今井登志喜「戦争と政治〈評論〉」『饗宴』(日本書院)1号、1946年5月。
- 101 「平和をつくる——(座談会)」『婦人之友』40巻6号、1946年6月。
- 102 今井登志喜「社会現象の考察と数の概念」『社会圏』2巻2号、1947年2月。
- 103 今井登志喜「新学制と在来の高等学校」『季刊大学』1号、1947年4月。
- 104 「座談会 学生の生活を語る」『婦人之友』41巻7号、1947年7月。
- 105 今井登志喜・辰野隆「対談」『週刊朝日』51巻20号、1947年11月。
- 106 今井登志喜「民族の幸不幸」『8000万人』3号、1948年6月。
- 107 今井登志喜・池島信平「往復書簡 歴史とジャーナリズムの交叉点について」『芸苑』5巻6号、1948年7月。
- 108 今井登志喜「井上清提案「歴史教育と社会科」批判」『教育』(世界評論社)3巻5号、1949年5月。
- 109 今井登志喜「大学草創記」『文芸春秋』27巻臨時増刊、1949年12月。
- 110 今井登志喜「歌人今井邦子と私」『心』3巻1号、1950年1月。
- 111 今井登志喜「政治の優位と共産党独裁 世界に於けるソ連文化の地位」『改造』31巻5号、1950年5月。
- 112 今井登志喜「歴史教育について」『教育復興』3巻3号、1950年5月。

#### 論考(新聞)

1. 今井登志喜「ウィッチントンの出世噺(上)」『帝国大学新聞』329号、1930年3月3日。
2. 今井登志喜「ウィッチントンの出世噺(下)」『帝国大学新聞』330号、1930年3月10日。
3. 今井登志喜「大学の問題(上)」『帝国大学新聞』384号、1931年5月11日。
4. 今井登志喜「大学の問題(下)」『帝国大学新聞』385号、1931年5月18日。
5. 今井登志喜「学制改正意見について 文学部の制度」『帝国大学新聞』393号、1931年7月6日。



6. 今井登志喜「新入学生に与う(2) 学問は直訳ではない」『帝国大学新聞』525号、1934年4月23日。
7. 今井登志喜「美濃部問題検討」『帝国大学新聞』574号、1935年4月22日。
8. 今井登志喜「11月の論壇(1)/自由主義を繞る」『東京日朝刊新聞』、1935年11月3日朝刊。
9. 今井登志喜「11月の論壇(2)/農村問題に就いて」『東京日朝刊新聞』、1935年11月4日朝刊。
10. 今井登志喜「11月の論壇(3)/偶然と必然」『東京日朝刊新聞』、1935年11月5日朝刊。
11. 今井登志喜「11月の論壇(4)/文化の民族性」『東京日朝刊新聞』、1935年11月6日朝刊。
12. 今井登志喜「新年の意義(1)/家庭的な日本の新春」『東京日朝刊新聞』、1937年1月1日朝刊。
13. 今井登志喜「新年の意義(2)/天地おのずからの暦」『東京日朝刊新聞』、1937年1月3日朝刊。
14. 今井登志喜「新年の意義(3)/その因習的意味の喪失」『東京日朝刊新聞』、1937年1月4日朝刊。
15. 今井登志喜「大学本質の再検討 自発的改革を！」『帝国大学新聞』695号、1937年11月22日。
16. 今井登志喜「新学士に寄す」『帝国大学新聞』806号、1940年3月30日。
17. 今井登志喜「光栄の歴史の回顧」『帝国大学新聞』827号、1940年10月14日。
18. 今井登志喜「平賀総長を悼む」『帝国大学新聞』935号、1943年2月22日。
19. 今井登志喜「文化評論 大学の学区制」『帝国大学新聞』953号、1943年8月2日。
20. 今井登志喜「聡明な叡智を發揮せよ」『大学新聞』40号、1945年10月1日。
21. 今井登志喜「学制の全学的組織の強化」『大学新聞』46号、1945年12月1日。
22. 今井登志喜「定年随筆 幾度か辞職を決意—依願免官の幸福感—」『帝国大学新聞』1022号、1947年4月16日。
23. 今井登志喜「わが師わが友 文・辰野隆教授」『帝国大学新聞』1038号、1947年9月4日。
24. 今井登志喜「慎重な処置を望む—問題残す旧高等学校」『東京大学新聞』1056号、1948年1月15日。

### 監修・講義記録

1. 今井登志喜講述『史学概論 第1分冊』東京プリント刊行会、1935年。
2. 今井登志喜講述『史学概論 第2分冊』東京プリント刊行会、1937年。
3. 今井登志喜講述『史学概論 第3分冊』東京プリント刊行会、1937年。
4. 今井登志喜『史学概論：今井先生講義プリント1』帝大プリント連盟、1938年。
5. 今井登志喜ほか監修『華僑史』螢雪書院、1944年。
6. 長谷川如是閑・今井登志喜監修『現代思想講座 第1』白鷗社、1948年。
7. 井上幸治ほか著 今井登志喜監修『総合世界歴史事典』時事通信社、1955年。

### 同時代史料

#### 同時代史料（書籍）

1. 土肥原賢二『対支国民綱領の根幹』新友社事務局出版、1938年。
2. 美術工芸会編『高橋貞一郎滞欧作品集 1巻』美術工芸会、1940年。
3. 東京帝国大学『東京帝国大学学術大観』東京帝国大学、1942年。
4. 東京帝国大学南方資源研究会編著『南方資源研究資料 第1号』成美堂、1942年。
5. 東京帝国大学南方科学研究会医薬部編『南方医薬研究資料 第1号』南山堂、1943年。
6. 辰野隆ほか『忘れ得ぬことども 辰野隆対談集』朝日新聞社、1948年。
7. 辰野隆『ひとりごと』河出書房、1951年。

#### 同時代史料（逐次刊行物）

1. 蘆田伊人「平野村誌（今井登志喜監修）」『歴史地理』61巻6号、1933年6月。
2. 本郷富士夫「東京帝国大学新進教授評判記」『改造』16巻5号、1934年5月。
3. 齋藤隆而「東大今井登志喜氏の大学改革忌避論」『原理日本』14巻8号、1938年9月。
4. 林健太郎「ヒューマニズムの体現者—我が影響を受けた人」『文芸春秋』27巻2号、1949年2月。
5. 岡義武「今井登志喜著『英国社会史』」『史学雑誌』58巻1号、1949年6月。

6. 増田四郎「今井登志喜監修『世界史概説』」『評論』（河出書房）36号、1949年10月。
7. 矢口孝次郎「今井登志喜著『英国社会史』」『社会経済史学』15卷3・4号、1949年10月。
8. 林健太郎「今井登志喜先生のこと」『心』3巻5号、1950年5月。
9. 「今井登志喜先生略年譜」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
10. 有賀喜左衛門「今井先生と牛山秀樹さん」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
11. 池上謙三「追憶」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
12. 池上隆祐「今井登志喜先生を追悼す」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
13. 市村威人「今井登志喜先生と私」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
14. 一志茂樹「信州郷土史界のために哭す」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
15. 大畠清「私共の家庭に於ける今井先生」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
16. 上條憲太郎「今井先生を憶ふ」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
17. 小口珍彦「今井登志喜先生のことども」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
18. 小平恒彦「秀樹先生の面影」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
19. 小西謙「今井先生のこと」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
20. 辰野隆「弔詞」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
21. 塚原葦穂「追憶」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
22. 林健太郎「今井登志喜先生のこと」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
23. 平林武夫「木崎夏期大学と今井先生」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
24. 宝月圭吾「今井登志喜・牛山秀樹両先生の憶出」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
25. 村川堅太郎「今井先生への弔詞」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
26. 山中謙二「今井さんを憶ふ」『信濃』（第3次）2巻6号、1950年6月。
27. 中村吉次「今井先生」『信濃』（第3次）2巻8号、1950年8月。

28. 大野真弓「今井登志喜著『近世における繁栄中心の移動』」『史学雑誌』60巻7号、1951年7月。
29. 谷和雄「今井登志喜著『都市発達史研究』」『史学雑誌』61巻11号、1952年11月。

#### 同時代史料（新聞）

1. 「現代教育観(47) 尚志社同志社の模範的自治経営 黒風白雨楼」『東京朝日新聞』1912年6月30日朝刊。
2. 「学芸たより」『東京朝日新聞』1919年9月30日朝刊。
3. 栗生武夫「8月の論壇(4)/うわさの分析 如是閑氏の小品論文」『東京朝日新聞』1934年7月31日朝刊。
4. 石浜知之「2つの風刺的論文」『読売新聞』1935年10月3日朝刊。
5. 宮沢俊義「エチオピア問題 その他の諸論文」『読売新聞』1935年11月8日朝刊。
6. 馬場恒吾「1月の論壇(4)/真理と戦争 矢内原氏の興味ある一文」『東京朝日新聞』1935年12月31日朝刊。
7. 長谷川如是閑「民族発展の過程は幼稚な生物学的認識」『読売新聞』1936年1月4日朝刊。
8. 「町会講習会」『東京朝日新聞』1937年7月3日夕刊。
9. 「町会統制の講習会」『東京朝日新聞』1937年7月7日夕刊。
10. 「アイルランドの話 今井氏の講演」『東京朝日新聞』1938年3月14日朝刊。
11. 「文化団体・新友社を組織」『読売新聞』1938年11月20日朝刊。
12. 中島健蔵「新友社に就いて 東亜共同体の理想」『読売新聞』1938年12月11日夕刊。
13. 「生めよ殖せの運動 先ず帝都に火蓋 諸権威全国へ呼びかける」『読売新聞』1939年2月9日朝刊。
14. 「心身ともに強い人口を」『東京朝日新聞』1939年5月5日朝刊。
15. 「900年の英史に 今・最大の危機 歴史家今井教授の談」『東京朝日新聞』1940年5月30日朝刊。
16. 「都市問題会議総会」『東京朝日新聞』1940年9月28日夕刊。
17. 「輝く研鑽の歴史 完成近い『東京帝大学術大観』」『読売新聞』1941年3月6日朝刊。
18. 「全国放送 ラジオ学芸大会 ほか」『読売新聞』1941年3月14日朝刊。
19. 「1000年以上に互る両民族の抗争 史実に見る独ソ戦 今井東大文学部長の話」『読売新聞』1941年6月29日朝刊。

20. 「全国放送 放送時刻一部改正」『読売新聞』1941年11月1日朝刊。
21. 「東京大学学術大観が完成」『東京朝日新聞』1943年3月24日朝刊。
22. 「成長の歩みを記録 学術大観完成に東大の披露会」『読売新聞』1943年3月24日朝刊。
23. 「軍人援護学 確立研究会開く」『読売新聞』1943年6月8日朝刊。
24. 「大学入試改正の狙いをきく 先ず人物を選ぶ 総合銓衡で計る簡易化」『東京朝日新聞』1943年6月23日夕刊。
25. 「内地留学で優遇 恵まれたる環境に戦う8人の訓導「教育信州」にこの手本」『東京朝日新聞』1943年8月25日朝刊。
26. 「同心会発足 文化人を糾合、啓蒙運動展開」『東京朝日新聞』1945年10月6日朝刊。
27. 「都社会教育協会誕生」『東京朝日新聞』1945年12月25日朝刊。
28. 「民主主義科学者協会」『読売新聞』1946年1月11日朝刊。
29. 「教育裁判スタート 両委員会の顔ぶれ決る 教職追放」『読売新聞』1946年6月25日朝刊。
30. 「理事会と教授衝突 三つ巴の成城学園騒動」『読売新聞』1947年5月21日朝刊。
31. 「公選無視に反対 成城学園の学生ら新総長不信任」『読売新聞』1947年6月18日朝刊。
32. 「今井登志喜氏 死去」『東京朝日新聞』1950年3月22日朝刊。
33. 「今井登志喜氏死去」『読売新聞』1950年3月22日朝刊。

## 関係資料

### 関係資料（書籍）

1. 伊藤純郎『柳田国男と信州地方史 「白足袋史学」と「わらじ史学」』刀水書房、2004年。
2. 今谷明ら編『20世紀の歴史家たち（1）日本編』刀水書房、1997年。
3. 江口朴郎『江口朴郎著作集 2巻』青木書店、1975年。
4. E.ベルンハイム著 坂口昂・小野鉄二訳『歴史とは何ぞや 改版』岩波書店、1966年。
5. 大久保利謙『日本近代史学事始め』岩波書店、1996年。
6. 大野真弓『西洋史学への道 一旧制高等学校教師の回想』名著刊行会、2000年。
7. 粕谷一希『〈座談〉書物への愛』藤原書店、2011年。
8. 講談社『講談社日本人名大辞典』講談社、2001年。

9. 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、1979年。
10. 斉藤孝ほか『思索する歴史家 江口朴郎』青木書店、1991年。
11. 酒井三郎『日本西洋史学発達史』吉川弘文館、1969年。
12. 思想の科学研究会編『共同研究 転向 下巻』平凡社、1962年。
13. 社会経済史学会編『社会経済史学会五十年の歩み—五十年史と回顧・総目録』社会経済史学会、1984年。
14. 小学館『日本大百科全書』小学館、1994年。
15. 東京大学経済学部『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会、1976年。
16. 土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』中央公論新社、2012年。
17. 永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』日本評論社、1976年。
18. 長谷川亮一『「皇国史観」という問題—十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社、2008年。
19. 林健太郎『個性の尊重』新潮社、1958年。
20. 林健太郎『移りゆくものの影—インテリの歩み』文芸春秋新社、1960年。
21. 林健太郎『今井登志喜』諏訪史談会、1984年。
22. 林健太郎『昭和史と私』文藝春秋、2002年。
23. 福島恒春『大正デモクラシーと教育改革への道』東洋堂企画出版社、1984年。
24. マイルズ・フレッチャー著 竹内洋・井上義和訳『知識人とファッション：近衛新体制と昭和研究会』柏書房、2011年。
25. 村川堅太郎『古典古代遊記』岩波書店、1993年。
26. 矢部貞治『矢部貞治日記 銀杏の巻』読売新聞社、1974年。
27. 歴史学研究会編『歴史学研究会四十年のあゆみ』歴史学研究会、1972年。
28. 歴史学研究会編『歴研半世紀のあゆみ』青木書店、1982年。
29. 歴史学研究会編『証言 戦後歴史学への道』青木書店、2012年。

#### 関係資料（逐次刊行物）

1. 「郷土ゆかりの文化人 諏訪人物語（31）今井登志喜」『オール諏訪』84号、1991年9月。
2. 「日本考古学協会 50年の歩み」『日本考古学』第6号、1998年12月。
3. 青木康「今井登志喜著『都市の発達史—近世における繁栄中心の移動—』」『史学雑誌』90巻12号、1981年12月。
4. 池上隆祐「見果てぬ後ろ姿をのこして逝く今井登志喜先生を偲ぶ」『信濃教育』1139号、1981年10月。
5. 一志茂樹「今井さんを思う」『信濃教育』1139号、1981年10月。

6. 今井清水「學術の光をかかげた人々（1）今井登志喜」『オール諏訪』289号、2008年10月。
7. 今井信太郎「追憶」『信濃教育』1139号、1981年10月。
8. 今井信太郎「略年譜」『信濃教育』1139号、1981年10月。
9. 今井秀喜「父と私の信州」『信濃教育』1139号、1981年10月。
10. 大塚初重「駿台史学会の過去・現在・未来—考古学専攻の創設と駿台史学会—」『駿台史学』117号、2002年2月。
11. 金澤誠「今井登志喜先生を偲んで」『信濃教育』1139号、1981年10月。
12. 小西謙「今井登志喜先生のこと」『信濃教育』1139号、1981年10月。
13. 田口晃「矢田俊隆教授の経歴と業績」『北大法学論集』29巻3-4号、1979、年。
14. 中村吉治「昭和初年の歴史学界とわたし」『歴史評論』361号、1980年5月。
15. 中村英勝「今井登志喜先生--その人と思想」『信濃教育』1139号、1981年10月。
16. 奈須恵子「戦時下日本における「大東亜史」構想：『大東亜史概説』編纂の試みに着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』35号、1995年12月。
17. 初田香成「戦前期都市学会の活動とその都市史的意義—都市をめぐる学際的研究の萌芽」『学術講演梗概集.F-2, 建築歴史・意匠』2004年度、2004年7月。
18. 林健太郎「今井登志喜先生を想う」『信濃教育』1139号、1981年10月。
19. 原嘉藤「今井登志喜先生と信州の史学界」『信濃教育』1139号、1981年10月。
20. 堀之内敏恵「平賀肅学と大学人：東京帝国大学「評議会記録」からの考察」『Proceedings：格差センシティブな人間発達科学の創成』20号、2012年3月。
21. 村川堅太郎「今井登志喜先生」『信濃教育』1139号、1981年10月。
22. 森田鉄郎「今井先生を偲んで」『信濃教育』1139号、1981年10月。
23. 矢崎孟伯「今井先生と諏訪郡史編纂」『信濃教育』1139号、1981年10月。
24. 矢崎孟伯「一志先生と今井登志喜先生」『信濃』（第3次）37巻11号、1985年11月。

### 関係資料（新聞）

1. 「事典類の刊行盛ん 3万部売ったものも出る」『読売新聞』1954年6月13日朝刊。
2. 「西洋史 半数占める今井系」『読売新聞』1961年4月8日朝刊。
3. 池島信平「(8) 今井登志喜 折り折りの人」『東京朝日新聞』1967年10月25日夕刊。
4. 中屋健一「私の先生(23)」『東京朝日新聞』1962年4月23日夕刊。

### 関係資料（インターネット）

1. 「西洋史学研究室」『東京大学文学部・人文社会科学系研究科』2015年2月1日アクセス。  
<<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/laboratory/database/10.html>>
2. 「文学部の歴史」『東京大学文学部・人文社会科学系研究科』2015年2月1日アクセス。  
<<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/schema/history.html>>
3. 立花隆「東京帝大が敗れた日」『文芸春秋 WEB』2015年2月1日アクセス。  
<<http://gekkan.bunshun.jp/articles/-/354?page=6#a4>>
4. 二宮三郎「憲政資料室前史」『国立国会図書館デジタルコレクション』2015年2月1日アクセス。  
<[http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/287276/www.ndl.go.jp/jp/data/kensei\\_shiryo/kensei/pdf/Ninomiya.pdf](http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/287276/www.ndl.go.jp/jp/data/kensei_shiryo/kensei/pdf/Ninomiya.pdf)>